

<原典と解題>

翻訳論—原典と解題 堺利彦「翻譯に就いて」

長沼美香子

この小論は、日本における翻訳論(有名無名を問わず)に光をあてることを目的とした研究ノートである。今回は堺利彦「翻譯に就いて」を取りあげる。まず原典テキスト全文を記載し、次に短い解題を付す。なお、目次では「翻譯に就いて(感想)」となっているが、本文タイトルの表記を優先する。

【原典テキスト】

堺利彦「翻譯に就いて」『英語文学』第四卷第四号 緑葉社 一九二〇(大正九)年四月

私はどちらかと云へば意識や抄訳が好きである。意識や抄訳は勿論不正確を免れないものではあるが、読者に分るといふ点から云へば、直訳よりも、ずつとよく分かる場合が多い。私はさうした場合には、よく日本の事情に適してゐないところを省いたり、意味の足りないところを補ったりして手加減をしたことがある。元来直訳と云へば正確なものやうに思はれ勝ちだが、いろいろの例にぶつかつて、さてよく調べて見ると、不正確なのが多い。それよりも寧ろ私はいつも読者本位といふことを考へてゐる。翻訳といつても、どちらかといへば、原著書と翻訳者との合作といふ方が適当な位で、或は無意識である場合があるかも知れないが、翻訳者の気分なり態度なりが可成りの役目を演じてゐることを忘れてはならない。既に合作である以上、原文に拘らないで、自分の見方と取舍とを適度にほどこすのは、必ずしも悪いことだと思つてゐない。たとへばまた原文に忠実であつても、どうしても合作たることは免れないのだから、読者から見た場合必ずしも正確でない。抄訳若くば意識を不安心だと思ふ人は意味が本当に分つてゐないで抄訳若くば意識をしてゐる場合に限つてゐる。

けれどもいくら私が抄訳や意識が好きでも直訳をやつたことがないといふ訳でない。日外訳した Bernard Shaw の “Man and Superman” は初めの方を直訳、後の方を意識でやつて見た。直訳は随分厳密にやつたつもりである。馬場狐蝶、安成貞雄、和氣律次郎諸氏からいろいろの批評を受けて、五六度も修正を施した。Jack London の “Call of the Wild” は終始厳密な態度を忘れないでやつた直訳だと思つてゐる。どうも怪しいと思はれたところは馬場狐蝶、有島武郎二氏の教示を仰いだ。

之を要するに翻訳の巧拙は、文章の旨い拙いといふことには拘らないで、原文が読めてゐ

るかみないかといふことに関してある。それが第一の要件だといふことを忘れてはならない。旨い文章で、一寸見ていかにも巧妙に訳してあるやうに思はれるやうな翻訳で、よく読んで見ると、まるで意味の通らないやうなのや、外見は直訳的で、いかにも原文に忠実なやうに見えるがその実何のことだかまるで分らないやうなのが可成り多い。それらなぞは原文の読めてゐないことがいかに重要なことだかといふことを知る最よい例だと思ふ。原文がよく読めてゐて、初めて、意識なり直訳なり、好きなまゝに出来るわけだ。

特に私が抄訳をよくやるのは、大きな書物をいろいろの外的の必要上からさうやらざるを得ない場合が多いので、そのやうな時には、小説ならばなるべく趣味を失はないやうに、論文ならば書かれてある要領を洩らさないやうにと心掛けてやつてゐる。

抄訳は直訳よりも努力を要する場合がある。今私は Emile Zola の『労働』と、『日本一』に矢張り Zola の『ジェルミナル』とを翻訳してゐるが、何れも抄訳で原文の四分の一位に縮めてゐる。その経験から考へると、一部分を抽書きするのならば、何でもあるまいが、全体の精髓とでもいふべきものを condense するのは中々容易なことではなく、寧ろ原文通りの直訳よりも六ヶ敷いことだとも云ひたい位だ。私はいつも各章を読む時には紫なり赤なりの色鉛筆を用意する。さうして必要だと思はれる個所や、ぬかしてはならないと思はれる人名や地名などには、それで under-line を施して置く、で実際翻訳する時にはそれらの個所を決して落さないやうにするのは勿論のことだが、その上に必要に応じて前後の順序を顛倒したり、後でぬけたと思ふやうなところは勝手に中へ差し入れたり、後へ付け加へたりする。でそのやうな工夫を凝らすのだから、個所によつては筋書のやうなところもあるかも知れないが、出来栄えは筋書きとはまるで別種のものであることは云ふまでもない。Zola の『労働』には可成り repetition が多いやうだから、その辺の所は自然をなるべくこはさないやうにして、省いたり、前後を顛倒させたりする。

私の第一の目的とするところは、原文をよく味はつてそれを読者の頭に成るべく容易に這入るやうにするといふことを主眼としてゐる。そこにあるのだから、その目的に応じて其の時々の臨機応変の処置を採ることにしてゐる。

尚終りに本誌の来月号辺りから Karl Marx の“Labor and Wage System”を翻訳したいと思つてゐるが、これはその書物の性質上から、一字一句も忽せにしない直訳でやつて見やうと思つてゐる。(談)

【解題】

堺利彦は一八七〇(明治三)年に士族の三男として、豊前(福岡県)に生まれた。号は枯川。近代日本における先駆的な社会主義者のひとりであり、日本社会党と日本共産党の設立に参加している。一九三三(昭和八)年死去。

堺は、幸徳秋水らと「平民社」を結成した人物として知られているが、幸徳を含む十二名の社会主義者が処刑された大逆事件の際には、赤旗事件で投獄中であつたために、危うく難を免れた。この後、社会主義はいわゆる「冬の時代」をむかえるが、この時期に堺は「売文社」と

いう会社を営んでいる¹。この「売文社」開業の経緯やその具体的な活動については、黒岩比佐子『パンとペニー社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』に詳細に描かれている。堺の生涯の全体像を知るうえでは、林尚男『評伝堺利彦—その人と思想』などもあるが、同時代の他の社会主義者と比べて、堺についての言説はそれほど多くはない。

社会主義思想の活動家・文筆家としてのみでなく、翻訳関連の功績でも、堺利彦は重要な足跡を残している。複数の新聞社で記者を経験した二十代から、堺は翻案小説などを発表していた。日露戦争に反対して『萬朝報』を去り、一九〇三(明治三十六)年に「平民社」を設立するが、その当ても翻訳に積極的に取り組んでいる。『共産党宣言』を幸徳秋水と共訳したのもこの頃である。そして、日本初の編集エージェント兼翻訳会社の構想を獄中で練り、一九一〇(明治四十三)年十二月に「売文社」として創業した(一九一九年八月に解散するまで八年以上も続いており、売文社のほうが平民社よりも長い)。翻訳者としては、マルクス、エンゲルス、レーニンをはじめとする思想関係の訳業はもちろんのこと、外国文学への造詣も深く、とりわけバーナード・ショーの作品を梗概にして多数紹介している。

ここで取りあげた堺の翻訳論は、「売文社」の解散後に発表されたものであり、黒岩(二〇一〇)が収集した膨大な資料にも含まれていないようだ。本稿では、実際の訳文や訳註も参照しながら、翻訳者としての堺利彦に焦点をあわせる。

一九二〇(大正九)年に発表された「翻譯に就いて」は、緑葉社発行の『英語文学』第四巻第四号掲載の談話筆記である。『英語文学』という雑誌は、一九一八(大正七)年一月五日に創刊、二一(大正十)年十二月に廃刊された月刊誌である(通巻で四十五冊)。創刊時の編集主幹は平田禿木だが、半年ほど後には生田長江が主幹、和田垣謙三・野口米次郎・平田禿木が顧問となっている。「売文社」で培った広い人脈が、この雑誌と堺を結んでいると思われる。『英語文学』の誌面構成は、文学評論、外国文学の対訳、日本文学の英訳が中心で、「懸賞翻訳課題」なども掲載されている。創刊号の「発刊の辞」には「インタナショナル」ということばがキーワードとして何度も繰り返されており、時代の空気を感じさせる。

堺利彦は「翻譯に就いて」発表の直後に、マルクス「資本家的蓄積の歴史的傾向(資本論第一巻第廿四章第七)」と「賃金労働と資本(第一章 賃金とは何か)」の翻訳を同誌に寄稿している。これは、マルクス原著の英訳テキストとその日本語訳の対訳という体裁をとり、さらに訳者の註釈として Notes が付けられている。「本誌の来月号辺りから Karl Marx の“Labor and Wage System”を翻訳したいと思つてゐるが、これは書物の性質上から、一字一句も忽せにしない直訳でやつて見やうと思つてゐる」(「翻譯に就いて」末尾より)という予告の通り、社会科学というテキスト・タイプを意識して訳出を試みたものである。鈴木(二〇〇七)によると、『資本論』のはじめての邦訳は、松浦要が一九一九年九月に出版した部分訳(第一章から第三章、経済社出版部)であった。しかし、堺利彦や河上肇らから誤訳を指摘され、全訳を断念したという。同年十二月には、生田長江の部分訳(第一章から第四章、緑葉社)も刊行されている。さらに高島素之の翻訳が一九二〇年六月に、福田徳三校註『マルクス全集』(大鏡閣)の一部として第一章から第九章まで収録された(高島はその後も翻訳を継続し、一九二四年に全

巻を完成)。ちなみに、この高島は「売文社」の社員であったが、同社解散の中心となった人物でもある。

このように短期間に複数の『資本論』の翻訳が出版されている。しかも翻訳者の交友関係を考えると、相互にどの程度の影響を及ぼしあったのか気になるが、ここではその比較を試みるのではなく、堺の翻訳テキストのみを見ていくことにする。とりわけ堺の付けた Notes では内容解説だけでなく、翻訳方略にも触れている点に注目したい。逐語性を意識しながらも、翻訳プロセスに不可避である、さまざまな「シフト(shift ずれ)」に言及するのである。逐語性への志向は、たとえば以下のような訳文と訳註に典型的に示されているだろう。英語と日本語が一对一で対応しながら訳出され、省略部分にはその理由が説明されており、形式への「忠実性」に対するこだわりが見られる。

If several workmen were to be asked; “How much wages do you get?” one would reply, “I get a dollar a day from my employer”; another, “I get two dollars a day” and so on.

若し数人の労働者が “君は幾ら賃金を取つてる？” と問はれたなら、一人は “僕は一日一弗取つてる” と答へ、今一人は “僕は一日二弗取つてる” と答へたりするだらう。

Notes: from my employer は訳文中に省略した、どうも口調がよくないから。and so on は “答へたり” の “たり” できかせたつもり。

(「賃金労働と資本」二一三頁)

他方で、形式よりも内容を重視するところもあり、同一の英語に対して場合によって訳語を使い分けたり、異なる英語に対して同一の日本語を当てたり、原文にない語句を補ったりしている。そして、Notes の随所で次のように説明するのである。

・ “価格” は経済学上の用語だが、場合に依つては “代価” “代金” “値段” などと訳して置く。(四一五頁)

・ life は “生命” であり、又 “生活” である。場合に依つて其の二つの訳語に使ひわけしておく。(六頁)

・ laborer と worker とは、区別して使つてある様に見えない。(八頁)

・ 原文にない “例へば” といふ様な言葉を入れるのは反訳上の一つの心得である。原文にない “即ち” といふ言葉もあちこちに入れてある。(四頁)

(「賃金労働と資本」Notes より抜粋)

最後の例では「反訳上の一つの心得」[引用者註:反訳は翻訳と同じ]として、接続語句を付け加える点が述べられているが、このような「付加」についての説明は他にも散見される。たとえば次の Notes(「資本家的蓄積の歴史的傾向」冒頭部分からの引用)を見てみよう。読者にとって「分りやすい」「意味を明瞭にする」などの理由で原文の形式から離れたことが述べられている。

“場合”といふ言葉は原文にないけれども、斯う云つた方が善く分ると思ふ。expropriation は“収奪”とも訳されてゐる。labour of its owner は“その所有者の労働”であるけれども、“自己の労働”とした方が分りやすい。shades は degrees of colour で“濃淡の程度” “濃淡の言葉”などと訳してもよいのだが、ここでは“色彩”でいいだらう。two extremes は、財産所有者が労働者であると否との両極端。“社会的生産の発達” “自由個性の発達”といふ風に“発達”といふ言葉を二つ使ふのは不経済に相違ないが、意味を明瞭にする為には仕方がない。前に“社会的財産” “集合的財産”としたのも同じ理由からである。(中略) universal mediocrity は“普遍的中庸主義”或は“中庸普遍主義”と訳した方が好いかも知れない。rightly といふ言葉の置き所を変へて「正に」と訳したのも一つの方法だらうと思ふ。原文にない「故に」「そして」「然し」などを加へる事は、場合に依つて反訳上に必要な心掛だと思ふ。expropriation を「所有権剥奪」又は単に「剥奪」と訳したが、英語では人間を所有物から剥奪するといふ語法であるのに対し、日本語では人間から其の所有物を剥奪すると云ふ語法であるのだから、反訳上にはチョツト面倒な手加減が必要になる。...

(「資本家的蓄積の歴史的傾向」Notes 一六一—一八頁)

ここで翻訳研究の視点から注目されるのは、原文にないものを加えることで、訳文を「明示化(explicitation)」し、そうすることで「結束性(cohesion)」を生み出すという手法である。堺自身はこのような用語で説明しているわけではないが、単なる「分りやすさ」を志向する「意識」の主張ではないことは明らかだ。

意味の単位としてのテキストに不可欠な「結束性」とは、センテンスのレベルを超えたテキスト構成(texture)を創出する資源として、ハリデーとハッサン(Halliday and Hassan, 1976)が提唱した概念である。両者は英語をベースに結束性を「照応、省略・代用、接続、語彙的結束性」に分類しているが、言語が異なればどのような結束装置を選択するのかという傾向も異なるし、さらに翻訳プロセスを経ることで、結束性は影響を受ける。そのひとつとして、原文にない結束装置を付加して、訳文の明瞭性を増すという翻訳の普遍的傾向が考えられる。これが翻訳における明示化である(Klaudy, 1998)。Blume-Kulka(1986/2004)は、翻訳によって結束性が明示化されるという仮説(explicitation hypothesis)を導いている。

堺は社会科学という学術分野におけるマルクスの英訳テキストの特徴を考えて、できるだけ「直訳」的に日本語に翻訳しようと意図しながらも、同時に Notes で説明しているような方略を試みたのである。そしてこの方略は、結束性を明示化する結果となっている。

堺は「翻譯に就いて」の冒頭で、「意識や抄訳が好きである」と述べている。それは「原著者と翻訳者との合作」という観点から、「読者本位」の訳文を考えているためである。ジャーナリストとしての経歴をもち、日本初の翻訳会社「売文社」で数々の翻訳作品を生み出してきた経験から、堺は読者の求める、言い換えれば「売文」となり得る翻訳を心得ていた。この意味で、堺

利彦は職業としての翻訳者の先駆けでもあった。

.....

【著者紹介】

長沼美香子 (NAGANUMA Mikako) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。日本通訳翻訳学会理事。連絡先 mikako@rikkyo.ac.jp

.....

【註】

(1) 『売文集』の「序(売文社の記)」によると、得意先に配布した「売文社営業案内」には、「(イ)新聞、雑誌、書籍の原稿製作。(ロ)英、仏、独、其他外国語の和訳。(ハ)和文の外国語訳(英訳、仏訳、独訳等)。(ニ)演説、講義、談話等の筆記。(ホ)趣意書、意見書、報告書、祝辞、祝文、広告文、書簡文、其他一切文章の立案、代作、及び添削。(以下略)」とある。英語は堺自身、フランス語は大杉栄、ドイツ語は高島素之などが担当し、しかも「社中で出来ない事は、それぐ特約の専門家にやツて貰ひますから、何卒御安心の上、御用命を願ひます」(堺一九一二、六一九頁)とも書いており、昨今の翻訳会社で一般的な外注(アウトソーシング)をすでに採用している。

【参考文献】

- Blum-Kulka, S. (1986/2004). Shifts of cohesion and coherence in translation. in L. Venuti (Ed.) *The translation studies reader, second edition*. London and New York: Routledge.
- Halliday, M. A. K., & Hassan, R. (1976). *Cohesion in English*. London and New York: Longman.
- 林尚男(1987)『評伝堺利彦—その人と思想』オリジン出版センター
- Klaudy, K. (1998). Explication. in M. Baker (Ed.) *Routledge encyclopedia of translation studies*. London and New York: Routledge.
- 黒岩比佐子(二〇一〇)『パンとペン—社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社
- 鈴木直(二〇〇七)『輸入学問の功罪』ちくま新書
- 堺利彦(一九一二)『売文集』丙午出版社
- 堺利彦(一九二〇a)「翻譯に就いて」『英語文学』第四卷第四号、緑葉社
- 堺利彦(訳註)(一九二〇b)「資本家的蓄積の歴史的傾向(資本論第一卷第廿四章第七)」『英語文学』第四卷第五号、緑葉社
- 堺利彦(訳註)(一九二〇c)「賃金労働と資本(第一章 賃金とは何か)」『英語文学』第四卷第七号、緑葉社